

白居易と睡眠

——「閑」と「適」を充足させるもの——

埋 田 重 夫

〔一〕

白居易は、いわば哲學をもつ詩人である。その哲學獲得の軌跡は、彼の歩んだ實人生と深く係っており、晩年に洛陽に分司してからは、哲學觀を一層強固なものとしているように思われる。白居易の説く哲學は、單に觀念世界に止まるものとして存在したのではなく、彼の處世觀・人生觀・死生觀と絶えず表裏一體の關係にあつたようである。この點で、彼は理念と實踐とが矛盾なく併存するタイプの人間であつた、とも言えよう。そうした思想の骨格は、少年期に體驗した流浪窮乏の家庭環境や、いわゆる「牛李の黨爭」に象徴される中唐時代の複雑な政治社會（人間關係）を背景にして、次第に形成されたもので、その思想・哲學は、白居易という詩人が

生きた時代を無視して語ることとはできない。

一般に作家論を展開する場合、その人間の五情（喜怒哀樂怨）が、いかなる狀況においてどのような對象に向けられてゐるのか、という視點の設定が不可欠とならう。本稿では、白居易における自己充足（喜）にして「樂」なる境地）が、より多く睡眠の場に集中している事實に注目して、白居易の重層的な思想大系の一端を考えてみたいと思う。つまり ④白居易詠眠詩⁽¹⁾の分析と文學史的位置づけ、⑤詩人における睡眠の意味、⑥白氏の閑適世界と眠りとの關係、などの諸點について考察し、自分なりに整理し確認できた白居易像を提示してみたい。おそらくそれらの觀點を設定することによって、詩人白居易の價值認識の態様が、自然と明らかになるであろう。題材詩としての詠眠詩を通じて、白居易の閑適觀を把握

しようとの試みは、従前の文學研究においてほとんどなされていっただけに、興味ぶかい問題を含んでいるように推察される。

〔二〕

古代の中國人は、人壽の上限を百年と考えた。『詩經』(唐風・葛生)にみられる「夏之日、冬之夜、百歲之後、歸于其墳墓也」の詩句は、そうした共通の認識に支えられて詠われている。假りに人生を百年と考えるならば、實にそのうち三十年が、睡眠なる営みによって占められていることになる。この點で、われわれの日常生活と切り離せない睡眠が詩歌作品に詠い込まれることは、現實性・具象性・個別性・典型性を重視する中國文學の傳統から言っても、ある意味で當然の結果であろう。詩材として睡眠を取り上げる傾向は、白居易の登場によって一つの頂點に達し、唐代後期になっては、ほとんど決定的なものとなるようである。本節では白居易詠眠詩を考察する前段階として、漢魏六朝期におけるこの種の題材詩の特徴について概観しておきたいと思う。彼が前代からいかなる要素を踏襲し、またどのような要素を新たに累加しているのか、を知るためである。唐以前の詠眠詩については、

白居易と睡眠(埤田)

以下に示すごとく、おおよそ二つの系統に分類することが可能である(引用は全て遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩上中下』[中華書局、一九八三年九月]に據る)。

〔A〕

- 「夢」そのものを題材とする作品群——〔①歌上「夢詩」(先秦詩卷二)、②許翽「夢詩」(晉詩卷二十二)、③鮑照「夢歸鄉詩」(宋詩卷九)、④梁武帝蕭衍「十喻詩五首、其五、夢詩」(梁詩卷二)、⑤沈約「夢見美人詩」(梁詩卷六)、⑥何遜「夜夢故人詩」(梁詩卷九)、⑦王僧孺「爲人述夢詩」(梁詩卷十二)、⑧武陵王蕭紀「和湘東王夜夢應令詩」(梁詩卷十九)、⑨梁簡文帝蕭綱「十空詩六首、其四、如夢」(梁詩卷二十二)、⑩庾丹「夜夢還家詩」(梁詩卷二十七)、⑪姚翻「夢見故人詩」(梁詩卷二十八)、⑫盧元明「夢友人王由賦別詩」(北魏詩卷二)、⑬褚士達「夢人倚戶授其詩」(北齊詩卷四)、⑭庾信「夢入堂內詩」(北周詩卷三)、⑮雜歌謠辭「煬帝夢二豎子歌」(隋詩卷八)、⑯雜歌謠辭「文中子夢顏子援琴歌」(隋詩卷八)など。〕
- 〔B〕「眠り」そのものを題材とする作品群——〔①鮑照「擬阮公夜中不能寐詩」(宋詩卷九)、②沈約「直學省愁臥詩」(梁詩卷六)、③劉孝綽「夜不能眠詩」(梁詩卷十六)、④劉

孝綽「秋雨臥疾詩」(梁詩卷十六)、⑤梁簡文帝蕭綱「詠
 內人晝眠詩」(梁詩卷二十一)、⑥梁簡文帝蕭綱「臥疾詩」
 (梁詩卷二十一)、⑦劉孝先「和兄孝綽夜不得眠詩」(梁詩
 卷二十六)、⑧戴嵩「詠欲眠詩」(梁詩卷二十七)、⑨江總
 「靜臥棲霞寺房望徐祭酒詩」(陳詩卷八)など。

まず通史的にみた場合、詠夢詩・詠眠詩⁽²⁾ともに、六朝末の
 梁代頃から急速に多作されている事實が指摘できる。これは
 おそらく、同時期のいわゆる詠物詩流行の趨勢と決して無關
 係ではないであろう。花鳥風月や日常生活における身近な對
 象を見つめ、その形状形態を模寫する詠物詩は、六朝貴族サ
 ロンを中心にして次々と制作された。對句・典故の多用志向、
 詩的音調の諧和模索に平行して、詠物詩の量産は、この時代
 の文學の最大の特色であった。それら多種多様な詠物詩の影
 響のもと、詠夢詩・詠眠詩もまた、新たな題材詩として制作
 されていったようである。前述[A]Bの双方に、多數の詠物詩
 作品を遺した梁簡文帝蕭綱周邊の詩人が散見されることは、
 このことを最もよく表している。梁朝における各種題材詩の
 著しい増産は、中國詩歌史において特に強調されなければな
 らない現象の一つである。

結論的に言えば、六朝の詩人たち——貴族出身の文學者集
 團——における主要な詩作對象は、安閑自適の境地としての
 眠りよりも、戀しい女性・親しい友人と情を通わせてくれる
 神秘的な夢そのものであったようである。夢のなかで懷かし
 い故郷——あるいはわが家——に還るとの發想・心象は、唐
 詩や白詩にあってしばしば認められるものであるが、その種
 の作品の起點として、宋代鮑照「夢歸鄉詩」と梁代庾丹「夜
 夢還家詩」の二首⁽³⁾があることは、十分に留意されるべきであ
 る。夢という題材・素材への情熱は、六朝・唐代以後の中
 國知識人の間でも、ほとんど全く衰えることがなかったよう
 に見受けられる。

白居易と睡眠というテーマに限定して考えた際、どうして
 も無視できないのは、前述[B]に引用した「眠り」そのものを
 主題にした詩歌作品の存在である。とりわけ②⑨などにみら
 れる閑適的気分は、白居易晩年の價值觀にも類似しており、
 極めて注目し値する。二首の原詩を紹介する。

①「秋風吹廣陌、蕭瑟入南閣。愁人掩軒臥、高窗時動扉。
 虛館清陰滿、神宇曖微微。網蟲垂戶織、夕鳥傍欄飛。櫻
 珮空爲忝、江海事多違。山中有桂樹、歲暮可言歸。」(沈

約「直學省愁臥詩」。

⑩「絶俗、俗無侶、修心、心自齋。連崖夕氣合、虛宇宿雲纒。

臥藤新接戸、欽石久成階。樹聲非有意、禽戲似忘懷。故

人市朝狎、心期林壑乖。唯憐對芳杜、可以爲吾儕。」（江

總「靜臥棲霞寺房望徐祭酒詩」。

前者は『文選』卷三十にも收載されるもので、秋色こい時節、學舎で寝ている作者の心にふと生じた隱退歸郷の情を詠った作品であり、また後者は俗界から遠く隔絶した寺院での閑臥の境地を述べた詩篇である。兩詩に描かれる眠りは、喧噪の場——名利の場——の對極にあるとの點で共通しており、またそれが一首全體のイメージを自己完結させるうえで、必須のものとなっていることが理解されよう。

總じて言えば、六朝時代の詩人は好んで睡眠を詠う方向にある、と言える。しかしそれら睡眠描寫の大部分は、素材としてのそれであって、題材としてのものではない。しかも六朝詩にあつては、作家論の一環として睡眠の意義を考察することは、ほとんど不可能な状況にある、と判斷される。自己の人生哲學を睡眠なる營爲と結びつけて詠う詩人が、ほとんど指摘できないからである。陳の徐陵撰『玉臺新詠』には、

白居易と睡眠（埋田）

いわゆる閨怨詩が多數採録されているが、そこで引用される「眠り」や「夢」の多くは、あくまでも素材としての域を出ていないように思われる。先秦から隋代までに蓄積されたおびただしい詩歌作品を通讀しても、純粹な題材詩としての詠眠詩・詠夢詩が、それぞれわずかに九首・十六首しか指摘できないことは、中國韻文史における各種題材詩の系譜という觀點から考えても、まことに興味ぶかい。この點は、六朝時代に數多くの詠懷詩・詠史詩・遊仙詩が作られた事實と極めて對照的である、と言わねばならない。

詠眠詩の分野は、中唐を代表する詩人白居易の出現によって、大きな轉換期を迎えることになる。彼は先代詩人がほとんど手を加えていない新領域に、めざましい成果をおさめている。白居易における詠眠詩の量産は、本人の顯在的持續的意志によって達成されたと言うよりは、むしろその先天的な虛弱體質（「蒲柳」の質）や「兼濟」から「獨善」への劇的な思想轉換によって、必然的になされた、と考えるほうが實態に近いようである。先行作品の影響をほとんど受け繼いでいないという點で、白居易の詠眠詩は、その文學の中心部分に觸れている、と言えるかもしれない。少なくとも彼の個性が最もよく出ている作品ジャンルの一つ、とは斷定できるで

あろう。次節では、それらの作品をさらに詳しくみていきたい。

〔三〕

『白氏文集』七十一巻には、實におびただしい睡眠——より正確には睡眠の場——の記述が見出される。素材・題材いづれにあつても「眠りの場」は、白居易の文學を構成する詩材として、ほとんど必要不可欠なものであつたようである。

白居易と睡眠の關係は、この種の題材詩——いわゆる狹義の詠眠詩——の分野においてほとんど決定的であるが、いま注目すべきは、部分的な素材として詠出された眠りのなかにも、その時その場における作者の重要な價值觀を色濃く映し出したものが數多く指摘できる、という事實である。それらの作品に登場する眠りは、單純な場面描寫としてあるのではなく、一首全體によつて生じる心象の方向性を、ほとんど決定づけているものが少なくない。以下それらの作品を引用してみたい（テキストは『那波本白氏文集』〔陽明文庫本〕⁽⁴⁾を使い、篇目番號は花房英樹『白氏文集の批判的研究』（朋友書店、一九七四年七月）收載のものを用いる。以下同じ。）。

① 「桂布白似雪、吳縣軟於雲。布重縣且厚、爲裘有餘溫。朝擁坐至暮、夜覆眠達晨。誰知嚴多月、支體暖如春。中夕忽有念、撫裘起逡巡。丈夫貴兼濟、豈獨善一身。安得萬里裘、蓋裏周四垠。穩暖皆如我、天下無寒人。」（「新製布裘詩」〔0055〕）。

② 「食罷一覺睡、起來兩甌茶。舉頭看日影、已復西南斜。樂人惜日促、憂人厭年餘。無憂無樂者、長短任生涯。」（「食後」〔0321〕）。

③ 「龍蛇隱大澤、麋鹿遊豐草。栖鳳安於梧、潛魚樂於藻。吾亦愛吾廬、廬中樂吾道。前松後脩竹、偃臥可終老。各附其所安、不知他物好。」（「翫松竹二首、其一」〔0574〕）。

④ 「日高睡足猶慵起、小閣重衾不怕寒。遺愛寺鐘欹枕聽、香鑪峯雪撥簾看。匡廬便是逃名地、司馬仍爲送老官。心泰身寧是歸處、故鄉可獨在長安。」（「香鑪峯下新卜山居草堂初成偶題東壁五首、其四」〔0978〕）。

⑤ 「名利既兩忘、形體方自遂。臥掩羅雀門、無人驚我睡。睡足斗薨衣、閑步中庭地。食飽摩挲腹、心頭無一事。除却玄晏翁、何人知此味。」（「寄皇甫賓客」〔2235〕）。

⑥ 「短屏風掩臥牀頭、烏帽青氈白氈裘。卯飲一盃眠一覺、世間何事不悠悠。」（「卯飲」〔3568〕）。

①②③④⑤⑥の各詩は、諷諭・閑適・感傷・律詩・格詩歌行雜體・半格詩（律詩附）の部に収録されるもので、制作年次・創作場所はそれぞれ異なっているが、『白氏文集』の讀者にとっては、非常に通行性の高い作品となっている。前述諸詩は、その詩題からもわかるように、專一に睡眠を題材化するものではないが、そこで詠われる個々の眠りは、一首全體の基調（keynote）を構成するうえで、極めて重要な要素となつていえると言えよう。①は白居易前半生に作られた典型的な諷諭詩で、ヒューマンな彼の心情が最もよく表現された詩篇として名高い。大和五年六十歳の時に作られた「新製綾襖成感而有詠」〔2893〕の情感に類似していることも留意される。また②④⑥は、白詩の名作として時間・空間を超えて人口に膾炙していることは周知のことである。白居易文學における睡眠の比重の大きさは、既にこれら素材としての作品群に明確に現れているが、いま分析と考察の中心に置かれるべきは、詩題・内容ともに一貫して睡眠を扱ういわゆる純粹な白居易詠眠詩の存在であろう。数多い唐代文學者のなかで、彼ほどに眠りという題材に執着した詩人を指摘することはできない。彼は何故に詩材として安眠熟睡の場に固執するのか。日常生活に密着した白の文學の基本的性格や幼少からの

病弱な體質を考慮すれば、それはあるいは必然の結果であつたとも言えようが、この領域（事象）に對するこれほどまでの拘泥が、いったい何を意味するのかという點は、白居易を論じるものにとつて、やはり看過し難い問題を含んでいる、と言わねばならない。

廣義の白居易詠眠詩には、「八月十五夜禁中獨直對月憶元九」〔724〕などに代表されるいわゆる宿直詩・宿泊詩も含まれようが、いま題材と思想との關係を重點的に考察するうえで注目すべきは、彼の詠夢詩・詠眠詩という二つのジャンル作品である。題材詩の系譜との觀點に限って言えば、白居易は漢魏六朝以來の傳統的な二つの題材詩の流れをそのまま受け継いでいる、と考えてよい。問題は從來の傳統的な詠法のうえに、どのような新しい獨創性を加えているか、という點に絞られよう。

論證の手續きとして最初に、白居易によつて詠われた夢の詩を概觀し、ついで眠り自體を詠じる作品との異同を比較検討し、そして最後に自分なりの解釋（意味づけ）を提示したいと思う。狹義の白居易詠夢詩は、全部で十八首指摘できるが、そのうちの半数以上はいわゆる懷友の詩となっている。十八首の作品は、その内容から考えると、④夢のなかでかつ

ての想い出の地を訪れたことを述べるもの、③夢一般について説くもの、④親しき人と夢のなかで再會したことを詠うもの、の三つにはば分類できる。⁽⁷⁾ ④としては、「禁中寓直・夢遊仙遊寺」〔204〕「夢亡友劉太白同遊彰敬寺」〔1037〕「中書夜直夢忠州」〔1223〕「夢蘇州水閣寄馮侍御」〔2509〕を擧げることができるし、また③に屬するものには、嵩山への單獨登頂を夢のなかで達成したことを詠う「夢上山」〔3539〕、名利の地である長安を全く夢にみなくなったと述べる「無夢」〔2831〕、等しく七言絶句詩型を用いて、夢のごとき人間を説く「夢舊」〔849〕「寶曆二年八月三十日夜夢後作」〔2507〕「疑夢二首」〔2865〕〔2866〕などが指摘できよう。これらの作品群に對して④は、隔絶した友人（元稹・劉禹錫・李宗閔・庾敬休・劉敦質・韋弘景・李建・崔玄亮）肉親（白行簡）と夢によって情を通わせることを敘述するもので、その大多數は友情・情愛を主要なテーマにしている。例えば以下に擧げる二首は、その典型的詩篇となっている。

⑦ 「晨起臨風一惆悵、通川溢水斷相聞。不知憶我因何事、昨夜三迴夢見君。」（「夢微之」〔1023〕）。

⑧ 「昨夜夢夢得、初覺思踟躕。忽忘來汝郡、猶疑在吳都。」

吳都三千里、汝郡二百餘。非夢亦不見、近與遠何殊。尙能齊近遠、焉用論榮枯。但問寢與食、近日兩何如。病後能吟否、春來曾醉無。樓臺與風景、汝又何如蘇。相思一相報、勿復慵爲書。」（「夢劉二十八因詩問之」〔3017〕）。

白氏前半生における元稹、後半生における劉禹錫の存在は、「詩人と友情」との觀點から白居易論を展開させていくうえで、重要な問題を提起しているようである。二つの強烈な個性（人格）との終生不變の交情は、白居易の人間性を理解するために、極めて示唆にとむべきことと言えよう。概して人が他者のうちに、自己との同質性・異質性を見出して共鳴するとするならば、白におけるそれらは、いったいどのようなものとしてあったのであろうか。

ところで白居易詠夢詩に登場する人物でより注意されるべきは、現在生存して他郷にいる友人よりは、遠い過去に死去して泉下の住人となった舊友の存在であろう。それら故人との夢界での再會・歡談は、自分が高齢になればなるほど、白居易にとって耐え難い悲哀・寂寞・憂愁となっていたようである。「夢裴相公」〔0460〕「夢亡友劉太白同遊彰敬寺」〔1037〕「夢微之」〔3459〕などは、まさしくそうした情感を詠いあげる。

また亡友との再會という同じ主題を扱いながらも、これら一連の抒情詩とは性格を異にするものに、「因夢有悟」〔303〕（大和九年六十四歳、洛陽での作）と題される五言古體詩がある。

⑨ 「交友淪歿盡、悠悠勞夢思。平生所厚者、昨夜夢見之。

夢中幾許事、枕上無多時。欸曲數杯酒、從容一局碁。初見韋、尙書、金紫何輝輝。中作李、侍郎、笑言甚怡怡。終爲崔、常侍、意色苦依依。一夕三改變、夢心不驚疑。此事人盡佐、此理誰得知。我粗知此理、聞於竺、乾師。識行、妄分別、智、隱、迷、是非。若轉識爲智、菩提其、寂、幾。」〔因夢有悟〕〔303〕。

「抒情」と「説理」の交錯は、一般に白詩全體を特徴づけるものだが、本詩後半はその傾向を最も如實に示している。彼における詩作は、實人生におけるその時の自己確認の場——激しい情念の流れを理念の力によって統制する精神の場——としてあったようである。「佛教の理」は、晩年の彼の精神を安定化・沈靜化させるうえで、確かに大きな力を持ったと思われる。「理」を援用することで、自己の情念を管理し統制していこうとの姿勢は、實はその詠夢詩よりも詠眠

白居易と睡眠（埴田）

詩の分野にあって、一層著しい特色となっている。白居易詠眠詩には、自己確認の手段としての「理」が、さまざまな態様で詠われている。白居易後半生の精神的基盤となるいわゆる閑適の世界観は、とりわけこの題材詩のなかで繰り返し言及される。以下、このジャンルの作品に焦點を絞って、さらに詳しく考えてみたい。

〔四〕

詩題・詩文ともに眠りの場を取り上げる詩篇は、全部で五十首を数えるが、内容面からそれらは、より肯定的な方向で睡眠を捉える場合、より否定的な方向で睡眠を詠じる場合、の二つに大別することが可能である。後者に屬するものは、「寒食臥病」〔0678〕「村居臥病三首」〔0476〕「臥疾」〔2372〕「臥疾來早晚」〔3436〕などのいわゆる詠病詩であり、また不眠症の辛さや獨眠の寂しさを訴える「獨眠吟二首」〔1200〕「晝臥」〔0788〕「不睡」〔1307〕などであるが、それらの全詠眠詩作品に占める割合は、極めて小さくなっている。白居易が説く眠りのほとんどは、自己肯定・自己充足の場としてのそれであり、その「閑適」世界をよりよく實現させるための必須要件としてあったようである。肉體と精神を安定持續させる絶

對條件の一つとして、彼は睡眠の意義を何度も何度も説いている。その執着の強さは、李白・杜甫・韓愈らの文學の傾向・特色と比較しても、明らかに異質なものと言わざるを得ない。それ故にこの點にこそ、白居易の文學を成立させている核心があるように思われてならない。『白氏文集』のなかから、自己充足・自己肯定・自己確認としての眠りを積極的に詠う作品を抽出し、それら詩篇を白居易の傳記にしたがつて再整理すると以下のようなになる。

④ 40歳から49歳までの期間（左贊善大夫・江州司馬・忠州刺史・司門員外郎・主客郎中知制誥時代）へ○40歳・下邳へ「春眠」〔233〕、○45歳から46歳・江州へ「睡起晏坐」〔290〕、○47歳・江州へ「曉寢」〔106〕、○49歳・忠州へ「臥小齋」〔555〕。

⑤ 50歳から59歳までの期間（朝散大夫・上柱國・中書舍人・杭州刺史・太子右庶子分司東都・蘇州刺史・秘書監・刑部侍郎・太子賓客分司東都・河南尹時代）へ○52歳・杭州へ「閑臥」〔232〕、○53歳・洛陽へ「晏起」〔386〕「小院酒醒」〔235〕「臨池閑臥」〔235〕、○54歳・蘇州へ「北亭臥」〔217〕、○55歳・蘇州へ「晚起」〔246〕、○59歳・洛陽

へ「安穩眠」〔229〕「日高臥」〔2856〕「晚起」〔2864〕。

⑥ 60歳から75歳までの期間（河南尹・太子賓客分司東都・太子少傅分司東都・刑部尚書時代）へ○62歳・洛陽へ「睡覺偶吟」〔306〕、○64歳・洛陽へ「閑臥有所思一首」〔319〕、○65歳・洛陽へ「閑臥寄劉同州」〔329〕「曉眠後寄楊戶部」〔328〕「秋雨夜眠」〔321〕、○69歳から74歳・洛陽へ「春眠」〔360〕、○74歳・洛陽へ「閑眠」〔365〕。

これらを一瞥してわかることは、自己充足の場としての睡眠が、白居易の年齢が下るにしたがつて、より強くより多く詠われているという事實である。睡眠を詩材にする詩人は、白居易以前にも相當數いるが、「眠りの場」を彼ほどにブラシメージで詠い続ける作家はほとんどいない、と考えられる。白居易が三六〇〇首に達する膨大な作品を残した點を考慮しても、こうした創作傾向は決定的なものと言わざるを得ない。「體力の減退」「衰老の自覺」「分司生活への共鳴」という意識形成の過程にあって、詠眠詩の量産はあるいは必然とも考えられようが、「眠りの場」（「安息の場」）を自身の哲學觀に結びつけて、何度も繰り返し肯定してみせる姿勢は、他の詩人たちの文學と比較しても、明らかに特殊であると判

斷されよう。それは彼における詩作のあり方とも直結する極めて重要な問題ともなっている。

白居易が詠じる自己充足としての眠りは、實にさまざまなイメージでもって表現されている。そのイメージの擴がり・奥ゆきは、例えば禁中・小齋・小院・後亭・北亭・水堂・水窗・牀上・枕上・馬上・松陰・日向などの睡眠場所を示すことばや、春眠・夏眠・秋眠・曉眠・晝眠・午睡・醉眠・老眠・獨眠などの頻出語彙によっても、十分に窺い知ることができ。それらの作品世界にあつてまず第一に指摘すべきは、日が高く上るまで安眠熟睡できる洛陽での自己の境遇を、早朝の「五更五點」から宮城に出仕しなければならない長安の高級官僚たちの生活に對照させて詠う作品である。

⑩ 「鳥鳴庭樹上、日照屋簷時。老去慵轉極、寒來起尤遲。厚薄被適性、高下枕得宜。神安體穩暖、此味何人知。睡足仰頭坐、兀然無所思。如未鑿七竅、若都遺四肢。緬想長安客、早朝霜滿衣。彼此各自適、不知誰是非。」（晏起）〔386〕。

⑪ 「轉枕重安寢、迴頭一缺伸。紙窗明覺曉、布被暖知春。莫強疎慵性、須安老大身。雞鳴一覺睡、不博早朝人。」

白居易と睡眠（埤田）

〔曉寢〕〔1066〕。

⑫ 「怕寒放懶日高臥、臨老誰言牽牽身。夾幕繞房深似洞、重裯襯枕暖於春。小青衣動桃根起、嫩綠醅浮竹葉新。未裏頭前傾一盞、何如衝雪趁朝人。」（日高臥）〔2856〕。

⑬ 「重裘煖帽寬氈履、小閣低窗深地爐。身穩心安眠未起、西京朝士得知無。」（即事重題）〔3229〕。

⑭ 「軟綾褱薄繡被、涼冷秋天穩暖身。一覺曉眠殊有味、無因寄與早朝人。」（曉眠後寄楊戶部）〔3280〕。

ここで使用されている「老」「慵」「疎」「懶」「安」「穩」「暖」などの語は、白居易によって提唱され實踐された閑適獨善の情趣を最も濃厚に映し出すものとして、特に注意されなければならない。白居易晩年の價值認識の基幹は、既に「知足安分」「樂天知命」「止足不辱」などの常用表現にはつきりと顯れているが、突き詰めて言えば、それは肉體的精神的次元での「閑」と「適」の同時充足にはかならない。そうした價值觀は、もともと蒲柳の質であつた彼が、身體の衰老を痛切に自覺しだす頃——具體的には丁憂のため下邳金氏村に退居した四十歳前半頃——から徐々に芽生えていったもので、その後は年齢の推移に比例して加速度的に強化されてい

ったように思われる。貴族（任子）と士族（舉子）による政界での苛酷な権力闘争、宦官勢力と地方軍閥の跋扈抬頭、といった白居易晩年の社會環境は、彼における閑適獨善への傾斜を一層強めていったと考えられる。これらの前提にたつて前述諸詩を讀む時、名利の地、長安で早朝から狂走する人々に對する彼の優越感は、容易に理解されよう。白居易による「閑」「適」世界の實現達成は、名利少なき退老の地たる「洛陽」、中央官廳分局である閑職の「分司」によつて初めて保證されるものであった。「人生の達人」と稱される白居易が、退老の地としての洛陽、終老の職としての分司をそれぞれ選擇したのは、確かに優れた見識であつたと言えよう。「洛陽」「分司」への積極的肯定は、大和九年六十四歳のおり、洛陽で制作された二首連作の七言律詩「閑臥有所思、其一其二」〔3159〕〔3160〕に、極めて明確に詠出されている。

- ⑮ 「向夕褰簾臥枕琴、微涼入戶起開襟。偶因明月清風夜、忽想遷臣逐客心。何處投荒初恐懼、誰人遷澤正悲吟。始知洛下分司坐、一日安閑直萬金。」〔閑臥有所思、其一〕〔3159〕。

- ⑯ 「權門要路足身災、散地閑居少禍胎。今日憐君嶺南去、

當時笑我洛中來。虫全性命緣無毒、木盡天年爲不材。大抵吉凶多自致、李斯一去二疏廻。」〔閑臥有所思、其二〕〔3160〕。

中唐時代、長期にわたつて續いた「牛李の黨争」と大和九年十一月、突然に生じた「甘露の變」は、長安中央政界の陰濕さ・腐敗ぶりをまざまざと彼に自覺させたに違いない。「始知・洛下・分司坐、一日・安閑・直萬金。」（*shǐ zhī·luò xià·fēnsīzuò, yì rì·ānxián·zhí wànjīn*）は、この時における白居易の偽らざる實感であつたと思われる。白居易詠眠詩の際立った特色は、おおよそ「説理的 성격」と「閑適的 성격」の二點に集約できるが、⑮⑯の詩篇は、これらの特徴を最もよく示している。自己肯定・自己確認の一手段として「理」（公的・私的條理）を援用するのは、白居易文學全般に認められる傾向であるが、その特性は、やはり彼の詠眠詩——特に狹義のそれ——の分野においても、極めて顯著に現れている。抒情詩に導入される「理」（三）は、白居易の「情」（qing）を鎮靜し統御するうえで、確かに大きな作用をなしているようである。

本稿で最後に確認すべきは、「睡眠磁場」と「閑適世界」

との關係をどのように位置づけるか、という問題である。白居易にとって安眠熟睡の空間は、心身の拘束や違和感の全くない境地——いわゆる「閑」にして「適」なる境地——として存在したようである。時としてそれは、彼が晩年に傾倒した禪の境地（無の境地）にも通じるものであった。

⑬ 「後亭晝眠足、起坐春景暮。新覺眼猶昏、無思心正住。

淡寂歸一性、虛閑遺萬慮。了然此時心、無物可譬喻。本是有無鄉、亦名不用處。行禪與坐忘、同歸無異路。」（「睡

起晏坐」〔0290〕。

「心身の完全なる安定充足」を、いわゆる閑適概念の中核として理解するならば、晩年の白氏によってそのように感得される場が、より多く睡眠を取り巻く環境に集中している事實は、特に注意されてよい。もちろん白居易の「閑」にして「適」なる境地が、單に眠りの場へのみ限定されるわけではない。しかし白居易と睡眠の關係を無視して、その閑適觀の全貌を把握することは、ほとんど全く不可能であると言わねばならない。安眠は白氏の閑適世界を成立させる基本的中心の營爲として、何度も何度も敘述されている。「眠」を中心

白居易と睡眠（埤田）

にして、「食」「酒」「茶」「琴」「蓮」「鶴」「談笑」「散步」「觀花」「泛舟」……といった個々の價值が同心圓狀に擴がって、豊かな精神世界を構成しているというのが、いちばん實態に近いようである。「眠・酒・琴・茶」の四者によって形成される閑適空間を詠った作品としては、特に次の二首を掲げることができよう。

⑭ 「爛熳朝眠後、頻伸晚起時。煖爐生火早、寒鏡裏頭遲。

融雪煎香茗、調酥炙乳糜。慵饒還自哂、快活亦誰知。酒性溫無毒、琴聲淡不悲。榮公三樂外、仍弄小男兒。」

（「晚起」〔2864〕）。

⑮ 「軟褥短屏風、昏昏醉臥翁。鼻香茶熟後、腰暖日陽中。

伴老琴長在、迎春酒不空。可憐閑氣味、唯缺與君同。」（「閑臥寄劉同州」〔3239〕）。

白居易が「閑」にして「適」と感じた空間や時間は、その多くが相對的に何かしらの形で、睡眠の場に連續しているようである。「睡眠」を素材・題材にする詩には、おびただしい数の「閑」「適」の字が配されている。また逆に、「閑適」を主題にする詩には、その心象風景の典型として、「眠」

〔睡〕が描かれることが多い。「登山臨水」「探花嘗酒」「詠月嘲花」「醉舞狂歌」は、それぞれに白居易に充足感を與えたであろうが、日常のかつ持續的に意識された閑適世界は、ほかならぬ白家における「安息安眠」の場であつたようである。

② 「新浴支體暢、獨寢神魄安。況因夜深坐、遂成日高眠。春被薄亦暖、朝窗深更閑。却忘人間事、似得枕上仙。至適無夢想、大和難名言。全勝彭澤醉、欲敵曹溪禪。何物呼我覺、伯勞聲關關。起來妻子笑、生計春茫然。」〔春眠〕(0233)。

春の心地よい眠り・喜びを「閑」と「適」の至境として説く。『白氏文集』卷六「閑適」の部に收載される五言古體詩で、四十歳前半、下邳で詠まれたもの。洛陽退休以後、本格的に確立される閑適世界の典型が、既に四十代の早い段階で明確に表出されていることは、傳記上まことに興味ぶかい。

〔五〕

第一章節から第四章節まで、白居易と睡眠の關係を詠眠詩の分析を中心にして述べてきた。そして最終的には、彼の閑

適觀と睡眠とがどのような係りで結ばれているのかについて、若干の指摘を加えた。それらの議論の要點をまとめてみると、だいたい次の三點に絞られてこよう。

① 題材詩としての詠眠詩・詠夢詩の系譜は、漢魏六朝以來の長い傳統があるが、白居易はそうした系譜のなかにあつて、とりわけ詠眠詩の分野で目覺しい進展を遂げている。その作品の量と質は、おそらく唐代文學史にあって第一の地位を占めていると考えられる。

② 白居易詠眠詩の最大の特色は、おおよそ「說理的性格」と「閑適的性格」の二點に集約できるが、そこで描寫される睡眠磁場は、心身の安定充足の空間、拘束感や違和感の全くない境地、として詠われることが多い。こうした文學傾向は、白居易が五十九歳で洛陽に太子賓客分司として退居してから、加速度的に強くなっている。

③ 白居易が「睡眠」を素材化・題材化する作品には、「閑」や「適」といった價值——あるいはその類型としての「安」「穩」「慵」「懶」「幽」「暖」「飽」などの價值——が詠い込まれることが多く、また逆に、「閑適」を素材化・題材化する作品には、「眠」を中心にして「酒」

「茶」「琴」「歌」……などの多元的重層的價值が、同心圓狀に表出されることが多い。

「閑」にして「適」なる時、白居易はより多く睡眠の場にしたようである。彼にとって安眠休息の場は、その「閑」「適」世界を構成する中心かつ最小の単位であったように思われる。生來の病弱體質によって、彼は幼少の頃より眠りの場と深い關係をもつ詩人であった。白居易文學の一端を支える「詠病詩」「詠眠詩」の存在は、この事實を最も象徴的に示している。加えて、白氏の文學・言語に共通する日常性への徹底した密着は、こうした創作傾向を一層助長しているとも考えられよう。「疾病」も「睡眠」も、われわれの日常生活と不可分の事象だからである。

白居易後半生に制作された詠眠詩では、洛陽（退休終老の副都）への執着、分司（別置勤務官）への共鳴、睡眠空間（心身充足の場）の肯定、などが異常なまでに何度も繰り返して表白されている。この傾向は詠眠詩という特定の分野作品にのみ限られるものではなく、白居易のあらゆる題材詩にわたって広く認められる。彼は詩を作る行爲によって、自己の烈しい情念の流れを抑制管理しているかのように觀察される。

白居易と睡眠（埤田）

時として大きく揺れ動く情念を、白居易は詩作の営みのなかで、自ら手懷け鎮めているように見受けられる。人として生まれ人として生きていく「人生」にあつては、葛藤・苦惱・不安・當惑・焦燥・嫉妬といった感情を全て避けて通ることはできない。白居易は自分が抱える一つ一つの深刻な問題を、詩作のなかで——もっと限定して言えば「情」と「理」のせめぎあいのなかで——あるべき結論を導き出し、己が人生の方向を決定していったように思われる。晩年の彼における自己確認・自己肯定・自己統制の中心的な場となるのが、ほかならぬ睡眠をとりまく空間（「閑」と「適」を同時充足させる空間）であつたと言えよう。白居易にとって詩歌は、自己の人格全體に連なるものとしてあつたようである。

〔註〕

（１）本稿では、詩題に「眠」「寝」「臥」などの語をもち、一首全體が睡眠を主題（theme）にしているものを、狹義の詠眠詩と規定する。その他、睡眠を素材として部分的に敘述する作品は、廣義の詠眠詩と考え、必要に応じて言及する。また題材詩としての詠夢詩については、狹義の詠眠詩の下位分類の一つとして位置づけて使用する。

（２）〔B〕群に引用した④⑥は、厳密に言えば詠病詩として分類すべきであろうが、その内容から詠眠詩として処理する。以

下、唐代詩についても同じ基準に拠る。

- (3) 「銜淚出郭門、撫劍無人遑。沙風暗塞起、離心眷鄉畿。夜分就孤枕、夢想暫言歸。嬌婦當戶歎、繡絲復鳴機。慷慨論久別、相將還綺闥。歷歷簾下涼、朧朧帳裏輝。刈蘭爭芬芳、采菊競歲華。開窗奪香蘇、探袖解纓微。寐中長路近、覺後大江遑。驚起空歎息、恍惚神魂飛。白水漫浩浩、高山壯巍巍。波瀾異往復、風霜改榮衰。此土非吾土、慷慨當告誰。」(以上、鮑照「夢歸鄉詩」)。「歸飛夢所憶、共子汲寒漿。銅瓶素絲綆、綺井白銀牀。雀出丰茸樹、蟲飛玳瑁梁。離人不相見、爭忍對春光。」(以上、庾丹「夜夢還家詩」)。

- (4) 平岡武夫・今井清『白氏文集歌詩索引(全三冊)』下冊(同朋舍出版、一九八九年十月)所收、『四部叢刊本』との間に、若干の文字の異同があることが報告されている。

- (5) 本詩領聯における④「欹枕」「撥簾」の語義確定、⑤唐代詩語史におけるその位相、の二点については、かつて詳細に論じることがある。「遺愛寺鐘欹枕聽」考——白居易の詩語が意味するもの——(『中國文學研究』第十四期、一九八八年十二月)参照。

- (6) 「答山驛夢」〔0771〕「和夢遊春詩一百韻并序」〔0803〕〔0804〕の二篇は、その内容・形式の特殊性から、狹義の詠夢詩として数えていない。

- (7) 念のために言えば、この三分類は相対的なもので、④と⑤とが重複している作品(夢亡友劉太白同遊敬寺)〔1037〕

も存在する。また⑤に関連して、夢と女性を結びつけて詠うケースは、白居易の場合ほとんど指摘できない。

- (8) 會昌二年七十一歳、洛陽での作。題下自注(南宋紹興本)、「に「時足疾未平。」とある。因みに本詩第一句目について、『那波道圓本』では「夜夢健上山」に作り、『馬元調本』では「夜夢上嵩山」に作る。

- (9) 「天氣妍和水色鮮、閑吟獨步小橋邊。池塘草綠無佳句、虛臥春窓夢阿憐。」(夢行簡)〔2398〕。

- (10) 白居易と「疾病」との関係については、小稿「白居易詠病詩の考察——詩人と題材を結ぶもの——」(『中國詩文論叢』第六集、一九八七年六月)を参照されたい。

- (11) 個々の作品成立年次の考證は、朱金城『白居易集箋校(全六冊)』(上海古籍出版社、一九八八年十二月)に詳しい。

- (12) 「長途發已久、前館行未至。體倦目已昏、瞋然遂成睡。右袂尚垂鞭、左手暫委轡。忽覺問僕夫、纔行百步地。形神分處所、遲速相乖異。馬上幾多時、夢中無限事。誠哉達人語、百齡同一寐。」(「自望秦赴五松驛馬上偶睡覺成吟」)〔0340〕。

- (13) 「……又或退公獨處、或移病閑居、知足保和、吟詠情性者一百首、謂之閑適詩。……古人云、窮則獨善其身、達則兼濟天下。僕雖不肖、常師此語。……故僕志在兼濟、行在獨善。奉而始終之則爲道、言而發明之則爲詩。謂之諷諭詩、兼濟之志也。謂之閑適詩、獨善之義也。故覽僕詩、知僕之道焉。」(「與元九書」)〔1486〕。